耕地防風林１

整然と並ぶ防風林の様子です。
戦後、急速に農地が拡大される中、また、ほ場の区画を拡大して生産効率の向上を図る中、それまで薪炭林として残されていた樹木が伐採されて風を遮るものがなくなったことから、昭和30年代半ばから、毎年のように風害に悩まされるようになりました。
特に春の強風による被害は深刻で、乾燥して軽くなった火山灰土壌がさながら砂嵐のように舞い上がり、芽吹いたばかりの作物を痛め、吹き飛ばし、あるいは埋め尽くしました。
昭和50年代以降着実に防風林が整備され、その生長とともに風害も徐々に軽減されてきたのです。